

八 帰っておいで、アカウミガメ

ぼくたちの住む高鍋町には、毎年夏が近づくと、たくさんアカウミガメがたまごを産みにやってきます。

六月のある日の夜、ぼくは、アカウミガメを見ようと父と友だちのしげるくんと蚊口浜かぐち はまという海岸へ行きました。でも、なかなかカメはあらわれてくれません。ずいぶんと時間がすぎました。ねむい目をこすろうとしたとき、父が、

「あれを見てごらん。」

と言いました。見てみるとトラックのタイヤほどの大きなかげが、ゆっくりゆっくり、すなはまにあがってきているのです。

「やった。カメだ。」

ぼくは、かけ出そうとしましたが、横から父の大きな手がぼくのかたをつかみました。父は、

「だめだ。母ガメはとてもびん感なんだよ。たまごを産み始めるまでは、近よってはいけない。」

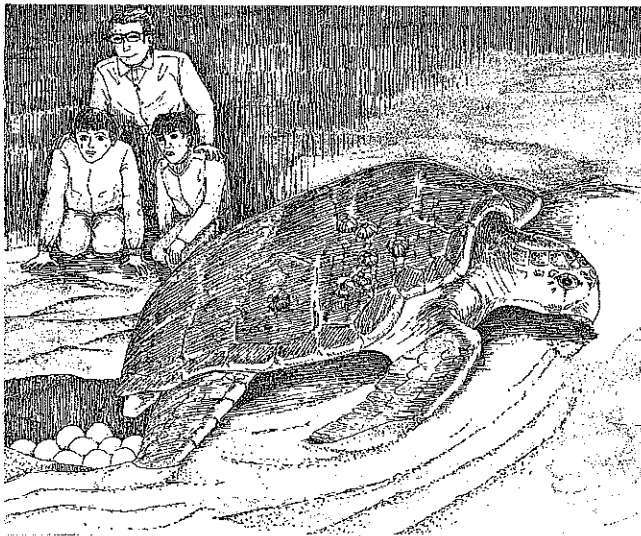
と教えてくれました。母ガメはたまごを産む場所をさがして、三十分ほど、すなはまを歩き続けました。ようやく母ガメはたまごを産み始めました。

「よし、そろそろ近よってみよう。」

父が、小さな声で言いました。

ぼくは、そうつと母ガメに近づきました。ピンポン玉のような白いたまごです。百こぐらい産みました。

「すごいや。こんなにたくさん産んでいるよ。」
ぼくは、大きな声を出してしまいました。一つ



二つと産み落とすときに、いたいでしょう、母ガメはなみだを流していました。

ぼくは、心の中で

「がんばれ。がんばれ。」

と、おうえんしました。

夏休みになりました。アカウミガメがたまごを産んでから二か月ほどすぎたある日、大きな台風がぼくの町をおそいました。はげしい風と雨に、木も電線も、ものすごい音を立てて、ゆさぶられています。

「そろそろ、たまごがかえるころなのに……。」

ぼくは、心配で一ばん中ねおれませんでした。

次の日の朝、台風は去り、一面に青空が広がりました。ぼくは、しげるくと海岸に向かって自転車を走らせました。海岸にはたくさんのお木が打ち上げられていました。たまごを産んだところには、大きな木が横たわっているではありませんか。

「大変だ。すぐに動かさなきゃ。」

でも、水をすった木はずっしりと重く、なかなか動きません。ぼくたちは、歯をくいしばって木を引っばりました。木は少しずつ向きを変えました。

「だいじょうぶかな。」

どきどきしながら、たまごのあるところをじっと見つめました。

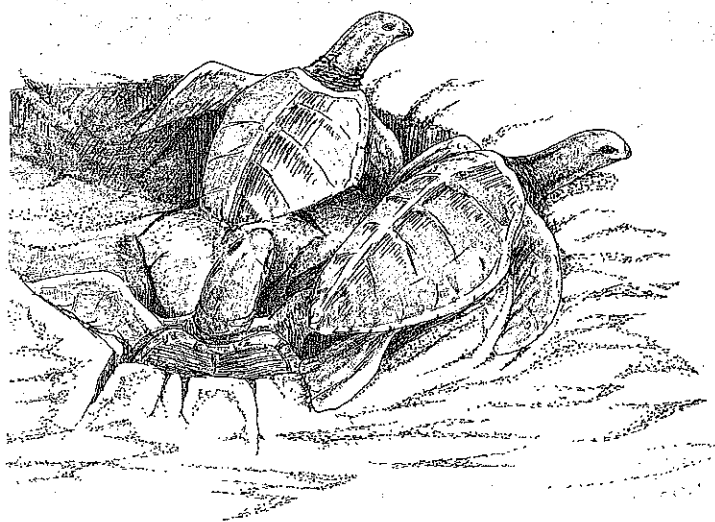
それから毎朝、ぼくたちはたまごの様子を見に行きました。

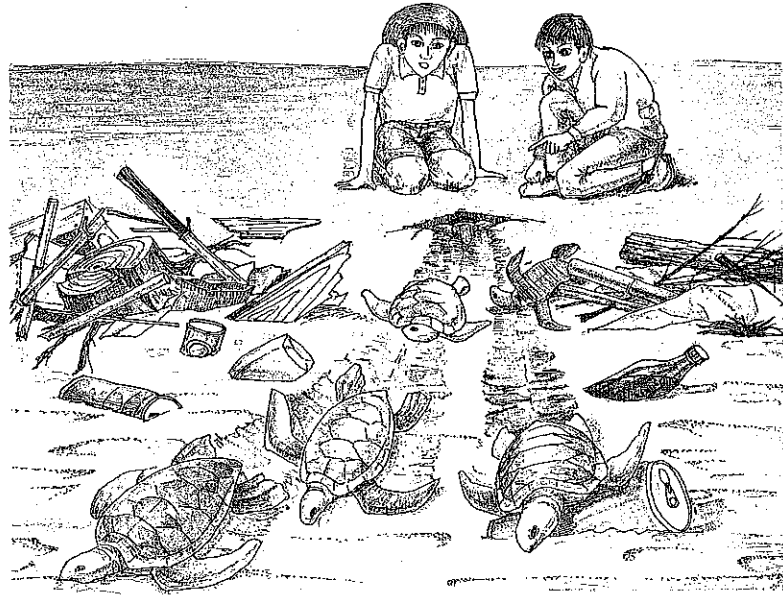
一週間ほどすぎた朝でした。いつものように様子を見にいくとすながゆらゆらと動き始めたのです。

「よかった。生きていたんだ。」

ぼくは思わずさけびました。

二十分ぐらいたったころでしょうか。アカウミガメの赤ちゃんが次々にあなからはい出





して、海の方へよちよちと歩いていきます。産まれたばかりの赤ちゃんなのにまるで自分の住むところをはじめから、知っているように思えました。

でも、子ガメの行く手にはプラスチックのよう器や木ぎれ、それに、ビニールぶくろなどのゴミが、たくさんちらばっています。子ガメたちは、ゴミにぶつかり何度も何度もひっくり返りました。なかなか海にたどり着くことができません。

ぼくとしげるくんは、子ガメのまわりのゴミを急いで取りのぞいてあげました。子ガメたちは、ようやくなみうちぎわまでたどり着きました。打ちよせるなみにお

しもどされながらも、大きな大きな海に向かって、かわいい手足をせいっぱい使って泳いでいきます。

きっと、お父さんやお母さんのところに帰っていくのでしよう。

ぼくとしげるくんは、

「また元気に帰ってこいよ。ぼくたちが、すなはまを守っているからね。」

と、水平線にきえていく子ガメたちに向かって、いつまでもいつまでも手をふり続けました。

